

5-4					
主題	実習Ⅰ段階から学んだ内容の振り返りと共有				
副題	様々な生活の場の特徴とコミュニケーション技術に関すること				
キーワード 1	生活の場の理解	キーワード 2	コミュニケーション	研究(実践)期間	6ヶ月
法人名・事業所名	学校法人 敬心学園 日本福祉教育専門学校 介護福祉学科				
発表者(職種)	瀬戸口琴美、田村畔、元丸萌(介護福祉学科1年生)				
共同研究(実践)者	西村圭司、八子久美子(介護福祉学科専任講師)				
電話	03-3982-2511	FAX	03-3982-5133		
事業所紹介	<p>本校は新宿区高田馬場の本校舎と豊島区高田の高田校舎にて、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、言語聴覚士、手話通訳士、音楽療法士を養成している。介護福祉学科は1988年4月に設置され、「一歩先を行くユニークな学び」などサポート力を土台に教員と共に実践力を身につけ、自己実現を目指している。</p>				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>本学科の介護実習は、2年間で450時間以上を3段階に分けて行なっている。実習での到達目標の1つに、様々な生活の場における、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者とコミュニケーションの実践、生活支援技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士としての役割についての理解がある。実習Ⅰ段階は、実習到達目標に向けての基本実習となる。本学科では早期に実習現場体験ができる「EEP」(アーリーエクスポージャープログラム)を取り入れ、入学して1ヶ月ぐらいで実習が始まる。この実習は、1年生の1年間の授業期間中に、20日間の実習を5日間ずつに分けて週1回ずつ行い、それを4つの施設で体験する。実習施設は、認知症対応型共同生活介護事業。特定施設入居者生活介護事業、訪問介護事業、通所介護事業、介護老人福祉施設、障害者支援施設などである。これらの施設を1年生で4種類の施設を体験することとなる。今年の入学生もすでに2クール終了している。学内での介護に関する知識・技術を平行しながら実習に臨んでいる状況で、実習Ⅰ段階の目標である、多様なサービスの場の理解やコミュニケーションの到達度について確認する。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>実習Ⅰ段階2クール終了した1年生、3名がそれぞれ違う実習施設における、施設の特徴や実習内容、コミュニケーション等について、実習で感じたこと、学んだことを振り返り報告し合う。施設で暮らしているのか、在宅で暮らしているのか、実習場所によって、利用者の生活環境の違いやサービスの提供のしかたに違いがでるのではないかと。また初めての実践的なコミュニケーション、学内で学んだコミュニケーション技術の活用ができ、利用者と円滑な関わりがもてたのかを振り返る。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>実習先：訪問介護</p> <p>実習内容：様々な在宅を一緒に訪問した。介護職が行う、食事、排泄(おむつ交換)、更衣、入浴の見学、</p>					

買い物同行、利用者とのコミュニケーション

学習内容：在宅には、寝たきりの方やディサービスに通っている方がいた。1対1だからその人だけに集中でき、長年住んでいる家で、その人らしい生活を送ることが出来る。着るという生活行為に対して普段その方が着ているようにすれば、介護されているという感覚をなくすることができる。それぞれの個性を大切に。家族支援がとても重要。その方の暮らしに合わせた支援をする。

コミュニケーション：声かけも1つの技術、名前を呼ぶことを意識する。なかなかコミュニケーションを続けることが困難。コミュニケーション技術を高めていくことで利用者を幸せにできることは理解した。非言語的コミュニケーションが難しかった。

実習先：特別養護老人ホーム

実習内容：施設内で行なわれている食事、排泄、入浴の見学、申し送り、図書館ツアーに同行

学習内容：施設のスケジュールに沿って生活が行なわれている。食事も皆同じ時間帯。その中には、食べたくない人もいたが、無理にはすすめず食べていただけの工夫をしていた。(水分摂取)理学療法士や看護師、介護福祉士等が、連携していた。自立支援のために排泄や入浴で自分のできるところは、自分で行なう。

コミュニケーション：認知症の方への適切な説明のしかたがある(トイレ介助時)、利用者が部屋へ誘ってくれて、その方の好きな作家の話をしてくれた。コミュニケーションのとり方の工夫が必要(肩をたたくなど)、多くの利用者の名前を覚えるのが大変、話せる人と話せない人がいた。クローズクエスチョンの使い方が難しかった。

実習先：グループホーム

実習内容：配膳、水分補給や食事、排泄の見学、買い物付き添い

学習内容：掃除や洗濯、調理を職員の方の声がけで行い、少しでも自分でしていた。身の回りのことを自分で行うことで、自尊心が守られ、それぞれの人が気持ちよく生活できている。

コミュニケーション：コミュニケーションをとるとき、質問するタイミングや話を広げる力がなく会話が続かなかった。同じ体験(歌を歌う)をして打ち解けてから、会話をすると話げできた。利用者の方から、生きていくコツを教えていただいた。認知症があっても、自分の経験や学んだ内容を若者に教えたい気持ちを持っている。実習最終日、利用者の方から「今日で最後よね。残念」と言われた。

《4. 取り組みの結果》

実習してきた内容を丁寧に振り返ることで、施設に関する特徴や、生活環境、環境が及ぼす利用者の暮らしへの影響やサービスの方法が整理できた。また初めての実習先のコミュニケーション実践、学校での理論は理解していたつもりであったが、実践となると、そう容易いものではないことを体験的に理解できた。少しでも利用者の方と、心が通じるとうれしくなることも感じた。コミュニケーションをとりながら小さな体験を積み重ねていくことが、利用者との信頼関係を構築すると考える。

《5. 考察、まとめ》

今回3つの実習先のそれぞれの振り返りを共有することで、施設の種別ごとの違いの明確化とそこで暮らす対象者の理解ができた。コミュニケーションは難しいが、喜びも得られる。サービスを提供していく人間関係の構築には、大事なスキルである。また実習を振り返り共有することで、他者と学びの共有化ができた。今回振り返ったことを次の実習に活かしたい。

《6. 提案と発信》

1つ1つの実習を丁寧に実習目標にそって振り返ることは、自分が理解したこと、できなかったこと、実践できたこと、できなかったことが明確になる。

実習を支えてくださった指導者の皆様ありがとうございました。